

千刈狸の呟き

～ 五十路の道川海岸 ～

道川地区の海辺、秋田市寄りの松林のはずれに石碑がポツリと立っている。「日本ロケット発祥記念之碑」と銘打たれた碑がかつての強者どもの夢を静かに語ってくれている。

6ヶ月程前のこと、日本中がサッカーW杯の日本代表の戦いぶりに熱狂しているさなか、科学史上に特筆されるべき偉業がなされた。7年がかりで地球から3億kmも離れた小惑星イトカワに離着陸ののち惑星のサンプルの入ったカプセルをみやげに奇跡の帰還をはたした(自身は大気圏で燃え尽きたが)探査機「はやぶさ」のことである。

3億km離れた長径わずか540mの極小惑星上に30mの誤差で着陸をするピンとこないがこれは東京から九州にいる人間の髪の毛一本を選び分けるレベルの精度であるとあまりのことに鳥肌が立った。その後も幾多の絶望的なトラブルに見舞われながらも研究者たちの機転と才覚で切り抜けては挑戦を続ける様子はスポーツとは違った静かな感動を呼び、JAXA(宇宙航空研究開発機構)の存在は一躍脚光を浴びたが、このJAXAの前身である「宇宙研」の生みの親が東大教授であった糸川英夫である。

かの小惑星に名を残す男の50才までの華々しい活躍の場がこの道川海岸であり、計88機を打ち上げたが、糸川のすごいところは実験の成功・失敗に一喜一憂せず両者あわせて「成果」と呼んでいたこと。

昭和37年5月道川での最後の打上げとなった空前絶後の大失敗 ロケット燃焼室が破裂し近くの民家周辺に落下して火の手が上がリ、さらに海中に没した二段ロケットの二段目が海中から飛び出して実験スタッフの頭上をかすめて砂防林へ

の際にも素早く指示を与えて二次災害防止につとめ、さらに事故原因の究明の為に記憶の確かなうちに、と早速スタッフ一人一人にコメントを求め、それを整理する作業を始めたという。

この事故のため宇宙研が内之浦にその舞台を移してなおも、糸川はその類いまれなリーダーシップを発揮して日本の宇宙開発の牽引車となったが、55歳の時一部マスコミとの軋轢のためか突然東大教授を辞任、以後は一切表舞台から姿を消した。

そして今を去ること200年、もう一人の異才がこの道川海岸の砂浜に立っていた。伊能忠敬57才、実地測量に基づいた日本地図を作った人物として広く知られている。伊能率いる測量隊がこの地を踏破・測量したのは1802年9月、江戸時代後期のことであった。長浜村(秋田市下浜)を午前6時に出発。勝手・道川・二古の各村を経て測量しつつ松ヶ崎村をすぎ子吉川を渡って本荘城下に至り、午後2時頃中町の宿(現由利本荘署のあたり)に至ったとある。行程約30km、測量しながらの半日余りで相当の健脚ぶりである。連日このペースでほぼ2ヶ月かけて秋田県の沿岸・内陸に足跡を印している。

数年前に国立博物館の特別展で伊能の地図の実物を観る機会があった。秋田あたりを見ると描かれた海岸線は見慣れた現代のものと同分違わぬ正確さであり、よく目を凝らすと和紙には針先であけた無数の穴が見てとれ、このピンホールを丹念にたどるように曲線が墨で描いてある。この精緻さと根気そして執念はいったい…。しばらく呆然と立ち尽くしたことであった。

伊能の異色ぶりは50才で隠居(家業は酒造りと米の集配)してかねて念願であった天文暦学を志し江戸に出て幕府天文方高橋至時の弟子になったこと。至時は20才も年下でありながら生涯師事・敬愛してやまなかったという。伊能については隠居仕事にありがちな余暇・趣味的なお気楽さは全くうかがえず、本の上だけの研究では満足しないで自分の目で確かめ、くり返し実行するという生き方を通して55才からはじめた測量で地球を1周するくらいの4万km近くを歩いたという。

早熟と晩成、決断と転身 五十路の科学者の才能が時を超えて道川の砂浜で交錯する。知的な好奇心、“知りたい”という内発的な欲求を満たしてくれるのが科学の面白さだと思う。五十路真ただ中のこの山狸もせめて好奇心だけは持ち続けていたい、そう晩秋の田んぼのひこばえのくすんだ青さほどもいいから、などと思うのだが、周囲からは「単なる雑学」「ただのスケベ心」等々、いささか不評なのが口惜しい。(孫七狸)